

2023 Winter

NO.481

AAR News



AARがミャンマーの最大都市ヤンゴンで運営する「障がい者のための職業訓練校」理容美容コースの授業風景

特集

障がいのある人々とともに

AAR ニュース 2023 冬号

- p2-5 特集：障がいのある人々とともに
- p6-7 活動レポート：パキスタン洪水被災者支援、「地雷問題の今」を考えるシンポジウム
駐在員だより：バングラデシュ
- p8-9 特別インタビュー：サヘル・ローズさん（俳優／タレント）
- p10-11 インフォメーション
- p12 ウクライナ危機 1 年



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会



ヤンゴンの職業訓練校で実技に励むコンピュータコース(左)、理容美容コースの訓練生(右)

特集

障がいのある人々とともに

AARがミャンマーの最大都市ヤンゴンで2000年から運営する「障がい者のための職業訓練校」は、これまでに累計約2000人の修了生を送り出し、障がい者の就労・自立支援の拠点として現地で高い評価を

ミャンマー
ヤンゴン職業訓練校
2年半ぶりに再開！

障がいのある人々の教育や就労、バリアフリー推進などの取り組みは、誰もが参画・共生できる社会の実現を目指すSDGs（持続可能な開発目標）にも掲げられた課題です。AARは障がい者支援を重要な柱のひとつとして、障がい者の職業訓練、障がい児の就学支援など人々に寄り添う活動を行っています。世界各地の事業地から報告します。



余暇の時間に宿題や自習に取り組む訓練生

受けています。新型コロナウイルスの感染拡大、国内の混乱の影響を受けて2020年3月から休校を余儀なくされていましたが、2022年9月に約2年半ぶりに再開し、ようやく運営が軌道に戻りつつあります。

同校には洋裁、理容美容、コンピュータの3コースがあり、全国から集まった小児まひや事故などによる身体障がい者が3カ月半の間、寮生活をしながら

技術を学びます(2022年は感染対策で規模を縮小し各コース9人・計27人定員)。経済的に恵まれない訓練生が多く、受講はすべて無料です。修了後の就職や起業支援にも力を入れ、コロナ前の2016〜2019年は卒業生の9割以上が就労しました。地元企業への働きかけとして、2018年にはCSR(企業の社会的責任)推進に取り組む現地団体とともに、同国で初めての「障がい者雇用の手引き」を発行しました。この手引きはミャンマー政府の式典などで公式に配布されているほか、ILO(国際労働機関)のホームページで公開されています。

ミャンマーでは社会・経済の混乱によって、障がい者の就労はますます困難になり、以前は働いていた人も失業や収入減に直面しています。訓練校再開に向けて奮闘したAARヤンゴン事務所の担当マネージャー、ニン・ワーワー・ウインは「無事に再開できるか不安もありましたが、今はうれしい気持ちでいっぱいです。コロナが落ち着いたら、訓練生の受け入れ人数

「裁縫を身につけて起業したい」

洋裁コース訓練生：ルウェイ・エイ・アムさん(18歳)

私は6歳の時、家族と一緒に茶畑で収穫作業をしていた際に地雷を踏んで右脚を失いました。一般校で勉強していましたが、コロナで休校になり、通学できなくなりました。そんな時に訓練校の卒業生から話を聞き、自分で生計を立てる技術を身につけようと応募しました。もともと裁縫が趣味なので、今は好きなことを学べてとてもうれしいです。将来はここで習得した技術を生かして、自宅で服を作る仕事をしたいと思っています。



「コンピュータ技術を磨いています」

コンピュータコース訓練生：ルウィン・モー・アウンさん(26歳)

私は先天的に両手の指がありません。大学を卒業して仕事を探しましたが、どこも採用してくれませんでした。私はコンピュータに興味があって、成人障がい者学校のコンピュータクラスに参加していましたが、もっと技術を磨こうと本校に来ました。ここは授業が素晴らしいだけでなく、社会生活に役立つスキルも学べます。卒業後は企業に就職して資金を貯め、地元で自分の写真印刷店を開きたいですね。





ウクライナの障がい当事者団体「リーダー」の皆さん

を増やし、就職支援をさらに強化する計画を立てています」。訓練生や現地職員は、日本の皆さまのご支援に感謝しながら、日々の訓練に懸命に取り組んでいます。

ヤンゴン事務所 清水由賀

ウクライナ

戦時下の障がい者に日本の支援を届ける

未曾有の人道危機が続くウクライナで、とりわけ厳しい状況に置かれているのが、国外への避難が難しく、公的支援も滞った国内の知的・身体障がいのある方々です。「最も困っている人々に支援を届ける」ことを基本とするAARにとって、戦時下の障がい者支援は重要な取り組みと言えます。

AARは現在、資金・物資提供を通じて、ウクライナの3つの障がい者団体を支援しています。同国南西部チェルニウツィ州の身体障がい当事者団体「リーダー」には、50人分の生活費（現金）を送りました。車いすで生活するオレグさん・リ

オレグさん・リリアさん夫婦



リアさん夫婦は、2014年にロシアに併合されたクリミア半島の出身。2年間はクリミアに留まったものの、子ども用の食料が手に入らないなど不自由なことが多く、チェルニウツィ州に移ったといえます。しかし、新たな危機の発生で再び困難に直面した今、「AARの支援で当面の食品や薬を買うことができました。私たちが応援してくれる日本の皆さんに感謝します」と話します。

同州ではこのほか、障がいのある国内避難民が身を寄せる16施設に冷蔵庫・冷凍庫、暖房器具などを提供し、車いす利用者が通院する地域の拠点病院の整備もサポート。また、同国中部ビンニツァ州では、知的障がい者の親の会「オープン・ハーツ」を通じて、激しい戦闘が続く東

部・南部から逃れて来た避難民を受け入れる施設の増築を進めています。

ウクライナ国内はガソリン、建築資材などの価格高騰に加えて、ロシア軍の攻撃で社会インフラが破壊され、停電が常態化していることから、AARは障がい福祉施設や国内避難民が暮らす施設に発電機を順次届ける予定です。

東京事務局 紺野 誠二

※最終ページに「ウクライナ危機1年」として、これまでの支援活動を掲載しています。

ラオス

キノコ栽培を通じて障がい者の生計支援

自然豊かな山岳地帯にあるラオス北部ウドムサイ県。AARは「障がいインクルーシブな地域社会推進事業」の一環として、障がいのある人々が自分で生計を立てられるように、キノコ栽培やヤギの飼育、バイク修理の技術研修を行っています。このうちキノコ栽培は特に需要があり、



栽培パックを作る研修参加者



収穫されたキノコ。
成長するとこうなります

一度の仕込みで3カ月間ほど収穫を見込めるため、仕事に就くのが難しい障がい者にとって、自分のペースで取り組める大切な収入源になっています。

農業省職員を招いて2022年10月に実施した栽培研修（3日間）には、障がい者26人と家族など介助者が参加し、①栽培パック（菌床）作り、②パックをドラム缶に入れて4時間蒸す殺菌作業、③菌系の植菌（植え付け）の手順を学びました。参加者は真剣な表情で講習に聞き入り、栽培パック作りでは、おがくずやコメなどの材料をビニール袋にしつかり丁寧に詰め込みます。

タジキスタン

泣き虫だった少女は今

タジキスタンで暮らすショフゾダさんは、生まれつきせき髄に損傷があり、歩行には松葉づえが必要です。高校でいじめに遭い、家に閉じこもるようになってしまいました。



再会したショフゾダさん（右端）と河野教授（右から2人目）

障がい者の社会参加に取り組む河野眞AAR理事（国際医療福祉大学教授）が2011年、リハビリ指導とカウンセリングのために彼女の自宅を訪問した際、AARの縫製研修コースへの参加を勧めました。

研修参加を通じてショフゾダさんは笑顔を取り戻し、元気な姿が見られるようになりました。5カ月の研修修了後、現地の障がい当事者団体に就職し、経理を4年間担当。現在はプロジェクトマネージャーとして、障がい分野のさまざまなセミナーで講師を務める活躍ぶりです。

2人の出会いから11年。河野教授は2022年10月、タジキスタンを訪れ、彼女との再会を果たしました。「かつての私のように自宅に引きこもっている障がいのある女性に、障がい者の権利について理解してほしい。自分の可能性を信じて社会に参加してほしい」と語るショフゾダさん。「もう、あの頃の泣き虫な私ではありません」と自信たっぷりに話してくれたそうです。

河野教授は「当時は彼女の将来がとても心配でした。それが今や自信に満ち、同時に柔らかな印象の大人に成長し、障がい分野で働いていることに感動しました。いつか彼女と一緒に仕事ができれば」と再会を喜んでいます。

元ドゥシャンベ事務所駐在員 東 マリ子



研修に参加したチウワンさん（中央）とデンジョンさん（右）

メモを取れなかったり、説明を理解するのが難しかったりする人は、周囲がサポートし、互いに助け合う心温まる姿が見られました。修了後には、それぞれの自宅に必要な資材が届けられました。

生まれつき両足に変形があり、木の棒を杖代わりにしているチウワンさんは、「キノコを上手に栽培して収入が得られたら、自分の銀行口座を開いて貯金したい。それを元手にして、将来はキノコを販売する店を持ちたいです」。そして「障がいのせいで何もできないと思っていました。研修に参加できて本当にうれしかったです」と笑顔で話してくれました。AARは障がいのある人々が参画できる地域社会を目指して、引き続き支援活動に取り組んでまいります。

ビエンチャン事務所 峯島 佑



すべての人にやさしい世界を目指して

支援事業部マネージャー 野際 紗綾子

AARは障がい分野の開発事業や緊急支援を長年にわたって実施しています。そこで私たちが大切にしてきたのは、教育や就労の機会、また、地域社会の中で、さらには災害や紛争の緊急復興支援において、弱い立場に置かれがちな人々を支えること、一緒により良い社会をつくること。そして、差別や偏見、困難な状況があろうとも、そうした目的を諦めずに地道に活動を続けていくことです。誰一人取り残さない世界は、すべての人にやさしい世界と信じて、今後も活動に取り組んでまいります。

災害支援

パキスタン洪水被災者支援
復興が進む中 課題は山積み

パキスタンでは2022年8月、記録的な大洪水が発生しました。AARが支援を続ける同国北西部ハイバルパフトゥンハー州では、商店や学校、農作物の生産が再開され、被災地は復興に向けて着実に歩み出していますが、まだまだ課題も山積しています。

AARは9月4日以降、井戸が使えなくなり、安全な水を確保で

きない住民への給水支援を毎日続けています。また、支援から取り残されがちな障がい者やアフガニスタン難民(3360人)に食料、衛生用品などを届けました。しかし、依然として支援を必要とする人々は後を絶たず、支援物資の配付が追いついていません。

厳しい生活強いられる難民

市場では再び野菜や日用品などが売られるようになりましたが、貧困世帯は急激に進んだ物価高騰の影響で、それらを買うことができません。洪水の影響で職を失った日雇い労働者などが多いため、損壊した家屋の修復の見通しも立っていません。

井戸の修復も思うように進まず、地域の人々が使う水源が不足しています。汚染された地下水を使うことで、洪水以前と比べて感染症のリスクが高まり、コレラなどにかかる住民が増加しています。感染症以外にも下痢や皮膚の

「私たちが何度も訪れて、
水を届けてくれました」

アフガニスタン難民居住地に暮らす
ヤール・グルさん(写真右)



私は日雇いで働きながら、妻と8人の子どもと暮らしています。洪水の被害に遭い、多くの支援団体が温かい食べ物やテントを提供してくれましたが、実際に私たちが一番困っていたのは安全な水が得られないことでした。AARは一度限りの支援ではなく、定期的に私たちの居住地を訪れて、安全な水を毎日供給してくれています。この水は飲み水にするだけでなく、泥まみれになった生活用品を洗うのにも役立っています。

隣国アフガニスタンから逃れて来た難民居住地の人々は、さらに厳しい生活を強いられています。土地を持つていない難民たちは、未だにテント暮らしを余儀なくされ、屋根のある家に戻るめどは立っていません。電気は太陽光パネルで発電し、かろうじて電球を灯せる程度です。冬の寒さに見舞



テント生活を余儀なくされる
子どもたち

われる中、難民たちは暖房を使うこともできません。また、彼らの慣習で、男性は女性と同じトイレを使用するのが好まないため、女性たちは寒空の下、野外で用を足さざるを得ない状況です。

厳寒期の到来に備えて、AARは12月にも、障がい者やアフガニスタン難民合わせて約3000人に食料、毛布などを配付しました。また、安全な飲み水を確保できるように共用井戸の建設・修復を15カ所で実施するとともに、難民居住地に女性・子ども用の簡易トイレ5基を設置しました。これらのトイレについては、使用にあたるルールや居住地住民が自分たちで管理することを伝えるワークショップも開催します。



AARが手配した給水車から水をくむアフガニスタン難民居住地の住民

対人地雷禁止オタワ条約から25年 「地雷問題の今」を考えるシンポジウム開催

地雷問題の現状と課題について考えるオンライン形式のシンポジウム「地雷問題の今」を2022年11月26日に開催し、多くの皆さまにご参加いただきました。対人地雷禁止条約（オタワ条約）が1997年12月に署名されて25年、さまざまな取り組みが進められてきましたが、ロシアの軍事侵攻が続くウクライナ、長く不安定な状況にあるアフガニスタンなどで地雷・不発弾の被害が絶えません。

シンポジウムでは、AAR会長の長有紀枝（立教大学教授）が対人地雷禁止条約成立の過程「オタワ・プロセス」について解説。AAR東京事務局の紺野誠二は、AARがこれまで世界各地で取り組んできた地雷対策に加え、ウクライナの地雷除去活動、人々に地雷の危険性を伝える「回避教育」について報告し、「国際社会の支援がウクライナに集中しているが、地雷除去が完了するまでには相当な時間を要する」と述べました。同じく東京事務局の鶴岡友美は、アフガニスタンの地雷被害の現状と回避教育について報告。「地雷のリスクや地雷を見つけた時の対応

方法を知っているだけで、子どもたちの命が助かることにつながる」と回避教育の重要性を訴えました。

最後に総括として、長がオタワ・プロセスに大きな役割を果たした「地雷禁止国際キャンペーン」（ICBL）の取り組みを振り返り、AARを含む各国のNGOが地雷廃絶の実現に向けて貢献し、ノーベル平和賞（1997年）を受賞するなど市民運動のモデルケースとなったことを強調しました。



アフガニスタンでの回避教育

シンポジウムの録画は右のQRコードよりご覧いただけます。



駐在員だより

画家の目に映った農民@バングラデシュ

首都ダッカから約150キロのナライル県の農村にたたずむ「SMスルタン・メモリアル・ギャラリー」。同県出身の画家スルタン（1923～1994）の作品を集めた美術館を訪れました。スルタンの作品の特徴は、非常に筋肉質あるいは豊満な農民の姿。しかし、実際の農民はやせた人がほとんどです。なぜ、スルタンは農民の肉体を力強く描いたのでしょうか。



スルタンの彫像

生家が貧しかったスルタンは、支援者の助けて隣国インドの芸術大学に入学し、その後は助成金を得て欧米に渡るなど海外で絵画の道を歩きました。30歳ごろ、久々に故郷に戻って以来、猫などの動物と暮らし、子どもたちに描画を教える生活を送ります。農民画家と称される由縁となった筋肉質、豊満な農民を中核に描くスタイルが確立したのは40代半ばごろのようです。



美術館の入場チケットに描かれたスルタンの絵

スルタンが日々接した農民は実際には貧しく、栄養不足でやせていました。しかし、絵の中の農民の体は心の強さを表しています。それは、日々の仕事だけでなく、不平等や困難に立ち向かう中で獲得されてきたものだとスルタンは考えました。スルタンが農民たちに感じた物怖じしない強さを、スルタン自身も臆せず作品に反映しているように感じました。

コックスバザール事務所 宮地 佳那子





俳優／タレント

サヘル・ローズさん

関わり続けることが心の支えになる

忘れないでくれてありがとう

俳優やタレントとして活躍するサヘル・ローズさんは、世界各地の難民や子どもたちとつながり、個人的に支援を続けています。7歳まで祖国イランの孤児院で過ごし、8歳で養母フローラさんとともに来日。さまざまな壁にぶつかりながらも「寄り添ってくれた人がいたから今がある」と語るサヘルさんに、人を支援することの意味、支援を受ける側の想いなどを聞きました。

（聞き手・AAR東京事務局 太田阿利佐）

— 2022年9月にポーランド、オーストリア、スロバキアを旅して、避難中のウクライナ難民の方々を訪ねたそうですね。

私は仕事で海外に行った時、その国の孤児院や児童養護施設を訪問して、何かしら必要なものを届けることにしているんです。今回はポーランドで舞台公演があり、この機会に周辺の国々に避難したウクライナの方を支援したいと思って、事前に自分でいろいろ調べて、連絡を取って、一人で回りました。ポーランドのウクライナ国境近くでお会いした難民の方、スロバキアで出会った方々に「私たちがここに存在していることを忘れないでいてくれて、ありがとう」と言われた時、はっとしました。メディアが注目するところでさえ、時間が経つと関心が薄

れてしまう。そうでないところには支援も届かず、すごく大変で、すごく孤独なんだと実感しました。

私は出会った方たちとできるだけの連絡を取り続けています。生活費や医療費の支援とは別に、何かあった時に会話できる、思い浮かべる顔があるという寄り添い方が、実はすごく大事な心のケアの一つだと思っています。

「魚の釣り方を教える」人に

— 難民支援や児童養護に関わる活動を始めたきっかけは何ですか。

2010年にNHKの「地球ドキュメント ミッション」という番組のキャスターを務め、貧困や戦争などの苦しい状況の中で生まれてくる子どもが実にたくさんいると知りました。その話を母にすると、「あなただっ

て、この子たちと同じ状況にずっといたかもしれない。あなたは縁があつて私と出会って、ここまで来たけど、あなたは自分の原点を忘れてはいけない。その原点を、あなたがこの子たちのロールモデルになる力にしてほしい」と言われたんです。イラン・イラク戦争（1980～88年）で家族を失い、孤児だった私は確かに彼らと同じでした。

まずは自分で世界を見ようと思い、インドに行きました。靴もはかずに物乞いをする子がたくさんいて……かわいそうで、たくさんおカネを渡しました。帰国して母にすごく怒られました。「おカネは悪い大人に吸い上げられる。あなたはあの子たちが不幸になる手助けをしただけだ」と。そして、いわゆる「魚をあげる人」ではなく、「魚の釣り方を教えてあげる人」になりなさい」と教えられました。もちろん今、食べ物が必要な人もいます。だから私は、一定期間は魚でいいけれど、その後は釣りの方法を伝えて、支援がいらなくなるやり方がいいと考えています。教育は何より大事です。数年前からインドネシア・ティモール島のアナという女の子の学費を支援しています。ヨルダンのシリア難民キャンプで学

校を運営しているNGO、バングラ
ディッシュでストリートチルドレンのた
めの学校をつくったNGOも支援し
ています。

子どもの笑顔の裏には

— サヘルさんは、よく現地に足を運ん
でいます。現地で見えてくるものはあり
ますか。

カメラを向けると子どもたちは
笑ってくれます。無邪気に笑っている
ように見えて、実は子どもたちって、
笑うことしかできない。親が苦しん
でいるのを敏感に察しているからで
す。特に難民キャンプや施設の子ど
もは、外部の人がきたら笑う。親や
家族の前でも、自分たちが明るく振
舞わないと耐えられないということ



「難民・移民フェス」に参加し、お菓子などを販売する
サヘルさん(右)＝埼玉県川口市で2022年11月23日

もあって笑う。笑顔の裏には、いろん
な思いがあることを再発見しました。
再発見というのは、私自身もそうだっ
たからです。孤児院にいる時は、誰か
が自分を引き取って、救ってくれる
ようにと笑っていました。日本の学
校でいじめにあって自殺を考えてい
たような時にも、母に心配をかけた
なくて、笑っていました。

ヨルダンのザアタリ難民キャンプ
で出会ったリムという女の子が、今で
も携帯電話で連絡をくれるんです。
でも言葉が通じないから何度も何度
も「アイ・ラブ・ユー」って繰り返す
だけ。私も「アイ・ラブ・ユー」って
何度も返すんです。30分ぐらい。でも、
それだけでいい。誰かとつながってい
ることが必要なんです。私は関わり
続けることが必要だと思っています。

— 支援を続けるのは大変です。大切
なことは何でしょうか。

自分にできること、できないこと
を、はっきり相手に伝えることだと思
います。それと、まずは自分や家
族の生活が大丈夫な状態にして、そ
のうえで自分がやりたいと思った時
にできる範囲で始めるのがいい。頑
張ったところで、無理なものは持続で
きなくなってしまうから。支援
に大小はありません。500円だって



すぐく立派な支援です。その思いは、
受け取る人にとってはすごく温かく、
助けられるものです。私は食事もで
きない貧しい生活をしていた時に、
スーパで働く女性から食べ物はい
ただいたり、親子で公園で暮らして
いた時に小学校の給食のおばさんが
声をかけてくれ、自宅に泊めていた
だいたり……そうして支えられまし
た。だからどんな小さなことでも、
できることから始めてほしいと思ひ
ます。そして、支援はしても、支配
はしないでほしい。

— 今年1月に出されたご著書『言葉
の花束 困難を乗り越えるための「自分
育て」』(講談社)には、サヘルさんの
体験も描かれています。

この本で一番読んでほしいのは、
母の言葉の数々です。まだ大学生だっ
た母は、家族の反対を押して私
を養女にしてくれました。血がづな
がっていることがすべてじゃない。

どんな人も誰かの家族になれるし、
誰かとともに生きることが出来る。
それが伝えられたらうれしいです。

人に助けられたからこそ

— サヘルさんにとって「支援する」
ことの意味は？

私、教育の現場をAARさんが守っ
てくださっているのが、とてもうれ
しいんです。人間は読み書きができ
て、知識を蓄えて、いろんな本を読
むことができれば、自分の考えを育
むことができる。でも、それがない
と「これしかない」と教え込まれた
ことに洗脳され、それが民族紛争や
テロにつながっていく。そうしないた
めにも、子どもが学ぶ環境を整える
のがとても大事だと思っています。

今、私が支援している学校に通う
難民やストリートチルドレンの子
どもたちが、全部で400人くらい
いるんです。その中のたった一人でも
いい。起業家とか、その国を良い方
向に引っ張っていくリーダーになっ
てくれれば、他の子どもたちのロー
ルモデルになるじゃないですか。そ
して、私もそうですが、人に助けら
れたからこそ、次の人を助けたいと
思ってくれると思う。そうすれば世
界は良くなっていくと信じています。

災害被災者支援へのご寄付 ありがとうございます

パキスタン洪水や令和4年8月大雨、台風15号の被災者支援にたくさんの個人、企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいております。温かいご支援に心より御礼申し上げます。個人情報に配慮し、20万円以上をお寄せいただいた企業・団体のみご紹介させていただきます。

パキスタン洪水被災者支援

キッチンスタジオパイザリー
全国友の会
リコー社会貢献クラブ・FreeWill

令和4年8月大雨被災者支援

株式会社オートボックスセブン

台風15号被災者支援

一般社団法人
あおい福祉AI研究所

(2022年11月14日時点、50音順)

相続財産をお寄せいただきました

井上 和久さま (愛媛県)
Y・Tさま (東京都)

(2022年9月8日～11月14日、50音順)

皆さまの思いを大切に受け止めて、難民や子どもたち、障がいのある方々のために役立ててまいります。

2022 冬募金 相次ぐ人道危機 厳しい状況に置かれる人々を支援

11月にお送りした冬募金のお願いに対し、皆さまから温かいお気持ちとメッセージを多数お寄せいただいております。心より御礼申し上げます。AARは障がいのある方など、支援が届きにくい人々に状況に応じたきめ細かい支援を行っています。一人でも多くの方に支援を届けるため、引き続きのお力添えをお願い申し上げます。



支援物資を届けるAAR/パキスタン駐在員の小柳勇人

4/22 (土) チャリティコンサートのご案内

かねてよりAARのチャリティにご協力くださっている岩田恵子さん(ロイヤルコンセルヘボウ交響楽団バイオリニスト)の呼びかけにより、4つの弦楽四重奏団がウクライナ人道支援のために集結します。マチネ(昼の部)、ソフレ(夜の部)と2つのプログラムをご用意。どうぞお聞き逃しなく。

日時：2023年4月22日(土)

マチネ 13:30～、ソフレ 18:30～

会場：銀座 王子ホール(東京都中央区銀座4-7-5)

※詳細は同封のチラシまたはHPをご覧ください。

1/16 正午
よりチケット
販売開始



シリア難民の子どもたちに パルシステム東京が継続のご支援

生活協同組合パルシステム東京は毎年、紛争などで苦しむ子どもたちを支援する「平和カンパ」を実施し、2016年以降、組合員の皆さまからのご寄付をAARがトルコで行うシリア難民支援にお寄せいただいております。2022年11月11日に贈呈式があり、ご支援を受けて取り組んでいるシリア難民の栄養改善事業について、AAR東京事務局の小田隆子さんがご報告しました。

同組合の皆さまからは「信頼できる団体としてAARにカンパをお送りしています。有効に活用されていることが分かって、うれしく思います」とのお言葉をいただきました。パルシステム東京は1998年より、AARの地雷対策や国内災害支援にもご協力くださっています。



パルシステム東京執行役員の間野直様(右)にAAR理事長・堀江良彰より感謝状をお渡ししました

デヴィ夫人よりウクライナ支援にご寄付

NPO 法人アース エイド ソサエティ(代表=デヴィ・スカルノ夫人)主催のチャリティパーティーが9月29日、東京都内で開かれ、AARに「ウクライナの人々のために役立ててほしい」とご寄付いただきました。当日はAAR副会長の加藤タキからデヴィ夫人に感謝状をお渡ししたほか、東京事務局の中坪央暁がウクライナの現状とAARの支援活動について報告しました。デヴィ夫人は当会の活動を20年以上にわたりご支援くださっています。



デヴィ夫人(右)にAAR副会長の加藤タキから感謝状をお渡ししました

※このチャリティパーティーは新型コロナウイルス対策として、手指消毒や飲食時以外のマスク着用を徹底して開催されました。

バレンタイン・ホワイトデーにぜひ！ ご注文はお早めに

今季、味とパッケージをリニューアルして発売したチャリティチョコレート。予約開始から1カ月で4,000個を超えるご注文をいただき、大変ご好評をいただいています。バレンタインやホワイトデーなどの贈り物にぜひご利用いただき、世界の難民問題にも想いを馳せていただければ幸いです。販売数に限りがありますので、お早めにご注文ください。



ビタスイート、ホワイト、抹茶ホワイト、モカホワイトの4つの味が楽しめます。1箱700円（税込）

お申し込みはこちら



書き損じハガキ・切手キャンペーン ウガンダの子どもたちに文房具を届けます

AARは書き損じハガキや未使用切手を活用し、支援として届けています。書き損じハガキ20枚で、ウガンダで暮らす難民の子ども1人に新学期用の文房具を届けることができます。年賀状など書き損じや余ったハガキ、切手がありましたら、ぜひAARまでお送りください。企業や学校の皆さまのご協力もお待ちしています。詳細は同封のチラシをご覧ください。



ウガンダの難民居住地の学校で勉強する子どもたち

シリア難民支援ご寄付者・会員限定の報告会を開催

シリア内戦が始まって11年。AARは2012年からトルコでシリア難民への支援、2014年からシリア国内で国内避難民への支援をそれぞれ開始し、食料配付や障がい者支援、コミュニティセンターの運営などの活動に取り組んできました。

トルコ事務所代表のハリル・オスマン（写真右端）が来日したのを機に、シリア難民・避難民支援にご寄付をお寄せいただいた皆さま、AAR会員の皆さまを対象にした報告会を10月4日、AAR東京事務所でのご参加とオンライン視聴の方式で開催しました。ハリルとトルコ駐在代表の景平義文（写真中央）が登壇し、トルコではシリア難民向けの公的サービスはあっても言葉が障壁となって利用が難しいこと、難民に対して労働法が守られず、最低賃金すら得られないことなど、シリア難民が置かれている困難な状況を説明しました。

参加者からは「シリア難民が抱える問題を相談する場所はあるか」「子どもの教育、医療サービスへのアクセスの現状は」といった質問が相次ぎました。また、自身もシリア難民であるハリルに対して、トルコから避難した時の状況やAARに入職した経緯などの質問も寄せられました。

AARは支援者や会員の皆さま限定で少人数の報告会を随時開催しています。開催予定はその都度お知らせしますので、お気軽にご参加ください。



「ボランティアさん お疲れさまランチ会」和やかに歓談

日頃のボランティア活動を労うランチ会を10月25日と31日にAAR東京事務所で開催し、17名のボランティアの方々に参加いただきました。ランチ会は2022年の会報秋号1万1,000部の発送が無事完了したタイミングで企画。AARの会報は長年にわたり、ボランティアの皆さんの手で封入作業を行っていましたが、2020年以降は新型コロナウイルス感染予防のため活動がままならず、会報の封入・発送は外部業者に委託していました。

ボランティア活動による2年半ぶりの発送作業は、9月6日から28日にかけて行われ、予定通り発送できるか不安があったものの、皆さんの積極的なご参加で予定より2日早く完了しました。

ランチ会では、名誉会長の柳瀬房子、会長の長有紀枝のほか、事務局スタッフも加わり、海外でのハブニングや苦労話、会創立時の思い出など、食事を楽しみながらさまざまな話題で盛り上がりしました。

※このランチ会は新型コロナウイルス対策として、人数を制限して開催しました。





左：AARがモルドバの大学寮に開設したチャイルドスペース。右端はAARの大室和也（撮影：小峯弘四郎）
右：ウクライナ西部テルノピリ州の修道院に避難した子どもたちとAAR理事長の堀江良彰

ウクライナ危機1年 AARは支援活動を続けます

2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ軍事侵攻から間もなく1年を迎えます。ウクライナでは子どもを含む約6,600人の民間人が犠牲になり、両軍の死傷者は約20万人に上ると言われます。周辺国に逃れたウクライナ難民と国内避難民は合計2,000万人を超え、「第二次世界大戦以降最大」と言われる人道危機が続いています。

AARは3月上旬、いち早く職員を隣国ポーランド、モルドバに派遣して支援活動を開始し、5月にモルドバの首都キシナウに現地事務所を開設。7月には比較的安全なウクライナ西部地域を理事長や職員が訪問し、AARの支援が人々に確実に届いていることを確認しました。現地の関係者からは「遠い日本から支援してもらえるととは思っていなかった。私たちに会いに来てくれて本当にありがとうございます」という声が聞かれました。

AARはウクライナ西部の修道院に身を寄せる国内避難民の母子たち、地元の知的・身体障がい者団体、モルドバに滞在する難民への支援を行っているほか、かねて協力関係にある英国のNGOヘイロー・トラストと連携した地雷除去を開始しました。また、来日したウクライナ避難民への緊急一時金の支給を社会福祉法人さぽうと21とともに実施し、

これまでに約220人に生活費をお渡ししました。

こうしたAARの支援活動は、皆さまからのご寄付に支えられています。仮に戦闘が終結して和平が実現しても、破壊された国土の復興、難民・避難民の帰還には長い時間を要します。引き続き、AARのウクライナ人道支援へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

これまでの主な支援内容

ウクライナ

- 国内避難民への食料、衣類、医薬品などの提供
- 障がい者の避難生活を支える現金給付、福祉施設への支援
- 地雷・不発弾の除去作業



モルドバ

- 食料や生活必需品、車いすなどの補助具の提供
- チャイルドスペースの開設、おもちゃの提供
- 難民と受け入れ地域の子どもの交流するコミュニティセンターの支援



©Yoshifumi Kawabata

日本

- 来日避難民の生活を支えるための緊急一時金の支給

編集部より

新年おめでとうございます。昨年はコロナ禍が続く中、ウクライナ人道危機、国内外の自然災害など多くの困難に直面した一年でした。新たな年が世界中の人々にとって穏やかな日々になることを願いながら、私たちは支援活動に取り組んでまいります。

マンスリーサポーターの皆さまにお届けする領収証について

2022年はより多くの皆さまにマンスリーサポーターとしてご支援いただき、心より御礼申し上げます。会内で行っていた領収証の発行・発送作業が困難となりましたため、2022年分より外部の発送会社へ委託することとなりました。領収証は、2023年1月下旬にハガキでお届けする予定です。確定申告の際にご利用いただけますので、申告手続きまで大切に保管くださいますようお願いいたします。

AAR News

2023 Winter NO.481

次号は2023年4月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan